

『女だけの町』を色取る男の価値

関 口 章 子

1 アマゾンという称号

Cranford は、残念ながら、アマゾンの町ではない¹。もちろん *Gaskell* は、遊び心から、克蘭フォードの淑女達を戦闘と狩りを好む勇敢な女部族に喩えたのだが、その刺激的な表現は単なるユーモアという次元を超えて、多くの議論を導き出してきた。例えば、*Patsy Stoneman* は、「克蘭フォードの淑女達の、どこが一体アマゾンなのか。戦士なのか。女性でないのか。男に敵対しているのか。女だけの町なのか。」(57)と問いかけているし、また *Arthur Pollard* は、「アマゾン」を「反語的な誇張表現」(75)として、彼女たちの日常生活の平凡さと対比させている。

実際、克蘭フォードには男達が多く行き交い、女達の平凡ながらも穏やかな、そして退屈な生活に彩を添える役割を果している。彼らが、男の役割——*the man's place*——を果す時、彼女達は優しい表情と柔らかな声(7)でもってそれに応え、おそらくは無意識のうちに、彼らの価値を認めるのである。その点からだけでも、「克蘭フォードはその存在を男に依存している」(*Jaffe*,51)という批判を免れることはできない。*Cranford* は、「男に一体何ができるのでしょうか」(1)という、アマゾンの皮をかぶった弱きものの発するテーゼを、男達が覆す物語なのである。

2 重要な男達

男達は、*Cranford* の全ての章に登場し、ストーリー展開上、重要な役割を担う。いかに男の多い物語か、簡単に挙げただけでも下記の通りである。

第一、二章 ブラウン大尉

第三、四章 ミスター・ホルブルック

第五、六章	ピーター	第七章	ホギンズ医師
第八章	ミスター・マリナー	第九章	奇術師ブルノーニ
第十章	いるであろう強盗団	第十一章	サミュエル・ブラウン (シニョール・ブルノーニ)
第十二章	ホギンズ医師	第十三章	ショールを買う農夫
第十四章	メアリ・スミスの父	第十五、十六章	ピーター

彼らは、その希少価値—女の数に比べれば—故に、多かれ少なかれ女達の関心を引き、話題の的となり、ひいては彼女達の日常生活の行方を左右するようになる。しかし彼らは、ホギンズ医師を除いては全て、*Cranford* の作中人物ではあっても、克蘭フォードの住人ではない。定着するかに思われたブラウン大尉は、克蘭フォードにふさわしくない近代文明のもたらした鉄道に轢かれて死に、ミス・マティーの思い人であるミスター・ホルブルックは、バリに取り付かれたようになって、やや不自然な死を迎える。二人とも克蘭フォード的でないものによって奪われ、その住人となる機会を取り上げられてしまう。そしてピーターは、当初、行方知れずで実在が無い。もっとも、彼の安否不明は生存の可能性を示唆し、最終章へ向けての伏線となっている。しかし物語前半の主要な男達は、主人公ミス・マティーに少なからず影響を及ぼしながらも、彼女の生活を変えるまでには至らないのである。また、ジェイミソンの奥様の召使いミスター・マリナーは、紳士階級ではないので克蘭フォードの住人の資格がない (24)。だが彼は、その尊大な態度で淑女達に畏怖の念を抱かせ、しかも克蘭フォードの取締役ともいえるミス・ジェンキンズまで歯が立たなかった (75) という対等に対立する立場にもならないことから、克蘭フォードの住人ではないことを自ら明かすと共に、女達の規定する「男」の枠組みがいかに狭く、枠外のものにいかに耐性がないかを提示する役割を果たしている。また彼には、いざという時には役に立たないという臆病な面があり (93)、平生の尊大な態度とあいまって、笑劇的な「いやな男」の典型を勤め上げてもいる。

物語後半には、奇術師ブルノーニ改めサミュエル・ブラウンやミス・マティーが金貨を与える農夫、また語り手メアリ・スミスの父等が、ミス・マティーの人生に大きな波乱や希望をもたらすが、彼らの役割は、ピーターの帰還という大団

円を迎えるための、いわば下働きに過ぎない。サミュエル・ブラウンのインドでのピーターとの接点が、彼の帰還のきっかけとなり、ショールを買うために金貨を受け取った農夫は、ミス・マティーの破産の引き金となり、そのためメアリの父がミス・マティーのお茶屋開店に尽力し、自立の手助けをする。そしてミス・マティーの生活が、苦しいながらもそのまま回って行くかに思えた矢先、ピーターが、無一文ではなく、かなりの金持ちになって帰って来るのである。彼らがピーターの帰還を盛り上げる働きをした証に、ミス・マティーは、その後直ちに店を閉めてしまう(153)。ピーターの財産のおかげで金銭の悩みはなくなり、と同時に貧しさを埋め合わせるための苦勞と好意は水の泡となり、ミス・マティーは永遠に自立の機会を奪われる。

結局のところ、クランフォードの町は、ブラウン大尉とミスター・ホルブルックで賑わい、ミスター・マリナーにささやかに抵抗し、強盗団の影におびえて女社会の頼りなさを嘆き、ホギンズ医師の結婚に色めき立ち、やがて農夫を介して不幸な事実を知らされるが、「女だけの知恵では手も足も出なかったので、男の——しかも、^よ他所者、ドランブルの実業家の——知恵と力に頼らざるを得なくなった」(小池 49) 後、やはり男であるピーターに、陥落されるのである。彼のみが、居住権を得るのである。ピーターの帰還は、サミュエル・ブラウンの奇遇とメアリの機転あつての結果なのだが、残念ながら、メアリもまた「他所者」である。

3 ブラウン大尉、ミスター・ホルブルック、そしてピーター

この行き交う男達の中で、とりわけ物語を彩る人物を挙げるとすれば、前半に出揃うブラウン大尉、ミスター・ホルブルック、そしてピーターである。Gaskell は、この三人に何らかの接点を設け、最終的にピーターに、三人分の役割が集約されるようまとめ上げたように思われる。

ブラウン大尉は、当初は淑女達に嫌われている。なぜなら、彼は貧しさを大っぴらに口にするという無神経さで、クランフォードの掟を破るからである。

I never shall forget the dismay felt when a certain Captain Brown came to live at Cranford, and openly spoke about his being poor — not in a

whisper to an intimate friend, the doors and windows being previously closed; but, in the public street! in a loud military voice! (4)

彼はなおも、貧しい老婆の荷物を運んでやるという行為で克蘭フォードの礼儀作法を破るが、それが禁を犯すことであるとは気付きもせず、自然に振舞い続ける。その様子に、淑女達の方こそ彼に合わせなければならなくなる。

...he came down upon us, untouched by any sense of shame, speaking loud and bass as ever, his head thrown back, his wig as jaunty and well-curved as usual, and we were obliged to conclude he had forgotten all about Sunday. (10-11)

彼に対する淑女達のこのような態度の軟化を、Edgar Wrightは「アマゾン達に彼とその娘達が受け入れられたのは、大尉の率直で自然な振る舞いの勝利」と評し、「彼は男であるのに」(104)と、アマゾン達のあり方を皮肉ってもある。

実際、Gaskell自身の、男ブラウン大尉への思い入れもかなりのようで、物語中、彼の「男らしさ」がしばしば強調される。例えば、彼を無作法者として敬遠する相手を“his manly frankness”でとりこにし、また、女では手に負えない家庭内の揉め事を“his excellent masculine commonsense”で解決する。そしてその道の権威とみなされるようになっても彼は、自分の人気にも、またかつて嫌われていたことにも気がつかない(5)。パーティーの席では、“the man’s place”として淑女達の世話を焼いてまわるので、その様子はこう描写される。

...and yet did it all in so easy and dignified a manner, and so much as if it were a matter of course for the strong to attend to the weak, that he was a true man throughout. (7)

“the strong”であるブラウン大尉の、“the weak”である女達への奉仕が「真の男の在り方」と規定するのは、ほかでもないGaskellであり、そこに彼女の理想の男性像を見ることが出来るのではないだろうか。

しかし、ブラウン大尉が真に克蘭フォードに定着することはかなわず、あっという間に列車に轢かれて死んでしまう。残された娘二人のうち、病弱な姉のミス・ブラウンも程なく息を引き取るので、妹で器量良しの働き者、ミス・ジェッシーだけが取り残される。すぐに困るのは、日々の糧である。淑女達は悩む。しかし、新聞で大尉の死を知った、ミス・ジェッシーに思いを寄せるゴードン少佐が駆けつけてきて、二人はすぐさま結ばれる。幸い、かつて障害となっていた病弱な姉はもういない。すなわち、克蘭フォードの女達の悩みは、男によって解消されるのである。ブラウン大尉は、列車に轢かれる事で自らを克蘭フォードから解放し、そして後に残した娘を男に託す事で、未婚女の町克蘭フォードから救い出した。だが、彼の死後もその率直さを象徴する“a loud military voice”(4)はミスター・ホルブルックに受け継がれ、男の物語は続く。

ミスター・ホルブルックは、病人がいるのでなければ声を控えめにすることもしないので(29)、克蘭フォードの店の中でミス・マティーと三、四十年ぶりに再会した時にも、大声だった。

‘Matty — Miss Matilda — Miss Jenkyns! God bless my soul! I should not have known you. How are you? how are you?’...Mr. Holbrook was evidently full with honest, loud-spoken joy at meeting his old love again; ... (30)

ブラウン大尉と同様、ミスター・ホルブルックも率直な人物である。しかし別れ際、ミス・マティーの姉であるミス・ジェンキンズについて気になることを言う。

‘Your poor sister! Well, well! we have all our faults;’... (30)

この時点で、すでに読者は、偉い牧師である父親と姉のミス・ジェンキンズが、身分不相応だとしてミスター・ホルブルックを退けたらしい(29)と聞かされているので、ミス・マティーが彼との再会後、しばらく自室にこもって泣いていたようなもの、納得できる。きっと、姉に妨害され結婚できなかったことを、自分の事なのに主体性を許されなかった過去を、悔やんでいるのだろう。Pollard

は、彼女を「無力で自信に欠ける」(67)と評し、Stonemanは、「彼女は19世紀の意図的な女性の幼稚さの犠牲」(61)としている。しかも、彼女の主体性の無さは、支配者であった姉の死と共により強固になった。すなわち、ミス・ジェンキンズの仕来りはより厳しく守られるようになり(26)、ミス・マティーは格言のように、「もし姉のデボラが生きていたら」と繰り返す。そのため、ミスター・ホルブルックの招待を受けたときにも、彼女は喜ぶどころか、こう思うのである。

She did not think Deborah would have liked her to go. (31)

だが、出かけてみれば楽しく、食後ミス・マティーは、姉の教育で大嫌いになったはずのタバコを、ミスター・ホルブルックのため、しゃれた手つきでパイプに詰める。そして、うっとりとして言う。

'It is very pleasant dining with a bachelor,' ... (34)

姉の束縛から逃れ、ミス・マティーの自立が図られようとする瞬間なのであるが、エスコート役であるべきミスター・ホルブルックもまた、あっけなく死んでしまう。Gaskellは、やや不自然な死をもって、また頼れそうな男をクランフォードから排除するのである。マティは二度と彼について口にしないことで、その死に耐え(39)、再びクランフォードの住人に戻る。

こうしてミスター・ホルブルックも退場したことで、ピーターの役割はより重く、華々しくなる。彼の失踪の直接の原因は、姉であるミス・ジェンキンズとの不仲にあった。厳格な彼女はピーターの冗談にも笑わず、彼を無作法で精神の向上を怠っているとみなしていたので、ピーターはいつか彼女を困らせてやろうと思っていたのだ(52)。そして度を越した悪ふざけをし、父親の激しい怒りを買ひ、彼は家を飛び出す(52-53)。

ミス・ジェンキンズは、ブラウン大尉とも文学上の論争からお互い仲が良いとはいえず(14)、ミスター・ホルブルックも妹から遠ざけ、そしてピーターとも反目しあう関係であった。つまり、彼らは三人ともミス・ジェンキンズが苦手だ

ったのである。さらに、ボズ氏の作品を好むブラウン大尉と同様、ミスター・ホルブルックも——ミス・ジェンキンズとは違って——古典だからという事ではなく、好みに従って本を選び (32)、ミスター・ホルブルックとピーターには釣りを通して親交があり (55)、そしてブラウン大尉とピーターは、その人柄で結び付いている。

He was like dear Captain Brown in always being ready to help any old person or a child. (50)

さて、共通点を持つ三人の男達と対立するミス・ジャンキンズは、それでは「アマゾン」なのだろうか。確かに彼女は、男性用のネクタイをして騎手のような帽子をかぶった意志の強そうな外見で、男女平等どころか女の方が上！という信条の持ち主 (12) なのだが、どうやら望んでそうなったわけではなさそうである。

Deborah was the favourite of her father, and when Peter disappointed him, she became his pride. (50)

また、ピーターの失踪後、ショックからやつれて亡くなってしまった母親の葬式の日と言う台詞の中にも、期待通り長男になり代わって父親を支えなければならぬと言う責任感と、そしてその重圧を、感じ取る事ができる。

'Deborah said to me, the day of my mother's funeral, that if she had a hundred offers, she never would marry and leave my father.' (58)

すなわち彼女は、勝手に失踪したピーターのせいで、男にならざるを得なくなったのである。クランフォードと妹を、それぞれ相応しくない男——ブラウン大尉とミスター・ホルブルック——から守ろうとし、むしろ男役に徹していたのではないだろうか。

物語終盤、思い出話の人物から実在の登場人物となったピーターは、ミス・マ

ティーの店に現れ、いたずら好きらしく、お客のふりをして彼女を驚かせる(150)。それからは、物語はハッピー・エンドへ向けて一気に加速する。ミス・マティーは、ピーターの財力によりお茶屋を続ける必要が無くなり、他の淑女達も彼のお金の恩恵を受け、かつてミス・マティーに親切にしたことのある者は全て、様々な贈り物をされたのである(153)。しかし彼の財産は、自分で店をやるというミス・マティーの、再び与えられそうになった自立の機会を奪い、そればかりか、ピーターという保護者を生み出す元ともなったのである。しかし、そのおかげでピーターは克蘭フォードの人気者として定着し、女達は、誰が彼を一番崇めているかと互いに張り合う始末だ(153)。最後は、登場人物達もほぼ全て揃い、和気あいあいで、かくて‘PEACE TO CRANFORD’²となるのである。ブラウン大尉もミスター・ホルブルックも、ピーターに全てを託して早々に退場し、他の男たちも、彼の帰還のために少なからず手を貸した。

しかし、ピーターは他の男達の働きにはお構い無しに、ミスター・ホルブルックのことで妹をからかう。

‘It was Holbrook; that fine manly fellow who lived at Woodley, that I used to think would carry off my little Matty’... (155)

他にもない、ピーターの失踪による母の死と、「デボラの独身の誓い」(58)に巻き込まれて、ミス・マティーも結婚しそびれたのである。そして彼女が独身だったからこそまた、ピーターの価値も高まったのである。

4 結

悪ふざけをして、勝手に失踪したピーターではあるが、彼の全てを Gaskell は、あくまで肯定して描いている。なぜならピーターには、東インド会社の仕事でインドへ行ったきり行方不明になった Gaskell の兄 John の姿が、投影されているからである。ブラウン大尉とミスター・ホルブルックの姿もピーターに写して、Gaskell は、理想の男性像を描いたのだろう。不意に現れ、人々に幸福をもたらしてくれる存在として。

Wright は、*Cranford* について論じる中で、「ギヤスケル作品に共通する副次

的テーマは、必要であれば、男に犠牲を払わせて何かをさせる女の力」(112)としているが、意識的に男達に視点を据えて読んでみると、むしろ彼らに振り回される女達の姿が浮かび上がる。様々な男達の繰り広げる人間ドラマに、女達はいちいち関心を示し、その事ばかり話題にする。*Cranford* は実質、男の町なのである。

注

本稿は第18回日本ギヤスケル協会全国大会(2006年10月1日、於中央大学)におけるシンポジウム「ギヤスケル文学と男性キャラクターのありかた」での発表に基づいている。

1. Elizabeth Gaskell, *Cranford*, 1853. の出だし、“Cranford is in possession of the Amazon”による。なお、本稿題名には小池 滋先生が「筑摩書房版世界文学全集」(昭和42年)のために御翻訳された際の『女だけの町』を使わせていただいた。
- 2 *Cranford* 最終章、第16章のタイトルである。

引用文献

Gaskell, Elizabeth. *Cranford*. 1853. Oxford: Oxford UP, 1972.

Jaffe, Audrey. “Cranford and Ruth.” *The Cambridge Companion to Elizabeth Gaskell*. Ed. Jill L. Matus. Cambridge: Cambridge UP, 2007.

Pollard, Arthur. *Mrs Gaskell: Novelist and Biographer*. Manchester: Manchester UP, 1965.

Stoneman, Patsy. *Elizabeth Gaskell*. Manchester: Manchester UP, 2006. First edition published 1987 by Harvester Press.

Wright, Edgar. *Mrs. Gaskell: The Basis for Reassessment*. London: Oxford UP, 1965.

小池 滋「メアリー・スミスへの花束—あるいは、ダブル流の愛情」『ギヤスケル文学にみる愛の諸相』山脇百合子監修 北星堂書店 2002年。

(北里大学非常勤講師)

